

地域生活文化領域（社会科分野）

担当教員

初澤 敏生・・・地域文化構造の調査と分析

中村 洋介・・・自然災害科学・防災教育

小松 賢司・・・日本近世社会史

鍵和田 賢・・・近世ドイツ宗教社会史、神聖ローマ帝国国制史

小野原雅夫・・・イマヌエル・カントの実践哲学体系に関する研究

牧田 実・・・コミュニティとまちづくり

野木 勝弘・・・社会科教育

近年提出された修士論文の題目

令和元年度

「伝統工芸品産業の新しい動き ―会津漆器産地を事例として―」

「地方都市におけるひきこもり支援の実態 ―福島市を中心に―」

平成30年度

「N.M.カラムジンのタタール支配イメージ

―19世紀前半のロシア・アイデンティティの問題と関連して―」

平成28年度

「近代国家における法の源泉とわが国の民主的立憲主義の発展・維持に関する考察」

「被害としての原発事故 ―現代社会の未必の加害―」

平成27年度

「日本国内におけるスマートテレビ普及要因に関する一考察」

「臨床工学技士養成専門学校における情意領域の育成」

平成26年度

「宮武外骨にみるジャーナリズムのあるべき姿に関する一考察」

「剣道の社会学的研究 ―スポーツ化と必修化をめぐる考察―」

「世論の社会学的研究 ―公共性とメディア空間の変容―」

平成25年度

「保原・梁川地域におけるニット産業」

「在住外国人と民間支援団体 ―群馬県東毛地域を事例に―」

「戦国期本願寺教団の対朝廷・公家外交」

修士論文の研究紹介

「N. M. カラムジンのタタール支配イメージ

——19世紀前半のロシア・アイデンティティの問題と関連して——



ロシアはヨーロッパに属するのか、アジアに属するのか、どちらでもない独自の存在なのか、この間はロシア人のアイデンティティを定義する問題として、現在に至るまで議論の対象になっている。本論文はこの問題に関して、ロシア人がタタール（モンゴル）に支配された中世の期間について、後世の歴史学者がどのように評価していたか、という観点から考察した。

19世紀の歴史家N.M.カラムジンの著作『ロシア国家史』を通じた分析の結果、当時の歴史学者はタタール支配時代を西欧的な理論を用いて解釈しつつも、そこからヨーロッパとは異なるロシア独自のアイデンティティを導きだそうと試みていたことが明らかになった。

「伝統工芸品産業の新しい動き ——会津漆器産地を事例として——」

本研究は、会津漆器産地を事例として商品種類、人材育成、産地転換などの面における新たな動き、及びその原因を考察することを目的としている。これらに関する新たな動きの探求について、ヒヤリング調査によるデータや現状を組み合わせて分析した。本稿で得られた結論は以下の通りである。

まず、漆器需要が減少しつつあるので、大都市を除けば消費地問屋はほとんどなくなり、地方においては産地問屋と小売店の直接取引になっている。時代の発展とともに、通信販売も出てきた。

次に、新商品開発においては他産業と連携した新商品開発の動きがある。例えば、木製漆器の自然性と実用性に着目したアウトドア用品の開発や、漆器の塗装技術と加飾技術を利用したネイルチップの開発などが行われている。そこで、アウトドア用品業とファッション業を皮切りにして、他産業との連携することが期待される。

また、漆器問屋から観光客向けの小売店や観光施設に転換するケースが増加してきている。それらの施設では、体験教室や工房を開設したり、歴史や文化を学ぶことができる資料館を開設したりしているような例がある。会津地方はもともと日本有数の観光地であり、漆器業との相乗効果が期待される。

さらに、会津漆器産地には手仕事に興味を持つ若者の人数が増加しているが、人材育成面ではさまざまな問題が存在している。会津産地では訓練校において職人の育成を進めているが、定着率は良くない。その理由として訓練校を卒業してもすぐに一人前の職人になれるわけではなく、さらに長期の修業期間が必要であること、その間の収入が保証されていないことなどの問題が指摘できる。これらの問題を解決できない限り、安定的な人材育成は難しい。行政による支援なども必要であると考えられる。

本研究では、経済の方面で近年会津漆器産地の新たな動きを考察したが、漆器は伝統的工芸品として文化的な価値も重要である。文化財は、ただ博物館などのところに観賞されるため保存されることを目標とするのではない。では、文化的にどのような意義があるのか、または文化的営みの中でどのような活用すればいいのかについて、さらなる調査研究が必要である。

「臨床工学技士養成専門学校における情意領域の育成」

本論文は臨床工学技士養成専門学校に勤める社会人大学院生による、高等教育に関する修士論文です。臨床工学技士は、医療機器の操作を通して患者の治療にあたる職種であり、医学系と工学系に関わる専門的な知識と技術を身に付けていなければなりません。患者と接したり、他職種と連携するためには、社会人基礎力やコミュニケーション能力なども必要となります。

このような知識や技術の基盤となる力をブルームらは「情意領域」と名づけました。本研究では、臨床工学技士養成専門学校において学生たちの情意領域をどのように育成したらいいかについて、具体的なカリキュラム案や授業案を作成して、それを現場で試行してみた上で、その効果を検証しました。



修了生の声

令和元年度に修士論文「伝統工芸品産業の新しい動き——会津漆器産地を事例として——」を提出して福島大学大学院を修了された劉文華さんに、コメントを寄せてもらいました。

劉文華と申します。中国の出身です。福島大学大学院において人間発達文化研究科で勉強していました。

2020年3月に福島大学大学院を修了してから、福島県内で食品加工機械のメーカーに就職しました。海外営業部に配属され、自社製品の中国大陸及び台湾香港マカオへの販売を担当しています。仕事内容はそれほど難しくありませんが、成長性があり、やっていると達成感が高いと感じられます。海外営業なので、海外出張が多いイメージですが、コロナ禍のため、入社して以来、主にSNSなどを利用しながらオンラインで営業活動を行っています。海外を相手にビジネスできるダイナミックさや毎日数多くの人とコミュニケーションできることも楽しく思います。



面白く、やりがいもある海外営業ですが、一方で大変だった時や辛い時もあります。外国人として、やはりまずは語学面に問題があります。日本と異なる文化やビジネス習慣のため、十分な語学力がなければ、上手くホウレンソウができません。また、外国人顧客との交渉で苦労しました。特に金額面の折り合いなどでは、しつこく粘られることが多かったです。

一年間を経て、中国語と日本語を生かせ、実践の中で思ったより良い実績を取れました。さらに市場開拓するために、今年の10月から上海に駐在することになりました。二年目の私にとって、大きな挑戦になるかもしれませんが、最善を尽くしていきたいと思います。

日本に留学して以来、ずっと福島に住んでいますが、社会人になって、学生時代とは大きく変わりました。まず社会人になっても勉強を続けなければいけないことを痛感しました。学歴に関わらず、分からないことや足りないものが非常に多くあります。「習うは一生」というのは生きる上で大事なことです。次に挫折や困難を乗り越える勇気も大切です。職場であろうと、生活であろうと、難しいからこそ価値があるという気持ちを抱え、頑張りたいと思います。

これからの自分に期待し、これからの人生も楽しんでいます。